子宮頸がん（HPVワクチン）予防接種について

子宮頸がん（HPVワクチン）の予防接種は、平成25年度から定期の予防接種ですが、定期接種開始直後から接種後の多様な症状の報告が相次いだため、ご案内を控えていました。川崎町では、令和3年度に対象者にリーフレットを郵送し、今回、積極的勧奨差し控え終了を受け令和4年4月よりご案内を再開しています。

対象は小学6年生～高校1年生（H18.4.2～H23.4.1生まれの女子）ですが、令和5年度にご案内を郵送するのは、令和5年度の小学校6年生、中学1年生、高校1年生（H22.4.2～H24.4.1生まれ，H19.4.2～H20.4.1生まれの女子）です。

子宮頸がん・ヒトパピローマウイルス感染症について

子宮頸がんの原因は主にヒトパピローマウイルス（以下HPV）による感染です。 HPVは200以上の型があり、子宮頸がんの原因となる型が少なくとも15種類あることが分かっています。公費で接種できるHPVワクチンは、子宮頸がんをおこしやすい型である「16型」と「18型」による感染の50～70%を防ぐことができます。感染予防効果を示す抗体は少なくとも12年維持される可能性があることも分かっています。HPVは特別なウイルスではなく、多くの女性が一生に一度は 感染するといわれるウイルスです。多くの場合、感染は一時的で、ウイルスは自然に排除されますが、感染した状態が長く続くと前がん病変（がんになる前の異常な細胞）を経て子宮頸がんを発症することが あります。

子宮頸がんは、子宮の頸部という子宮の出口に近い部分にできるがんで、日本では年間11，000人程度（2018年）が発症し、年間2，900人程度（2019年）が死 亡しているとされています。患者さんは20歳代から増え始めて、30歳代までにがんの治療で子宮を失ってしまう（妊娠できなくなってしまう）人も、1年間に約1，000人います。 初期段階では無症状で、がんが進行すると、異常なおりもの、不正出血や性交時出血、下腹部痛などの 症状が現れてきます。治療方法や予後などはがんの進行状態や全身状態によって異なります。

※HPV感染は、主に性的接触によって起こります。一生のうちに何度も起こりえます。

予防接種時の必要事項

①協力医療機関へ予約してください。
②接種当日に持参するもの
（1）健康保険証など「住所」「氏名」「生年月日」がわかるもの
（2）準備ができる場合は、母子健康手帳
（3）予診票は、保護者署名も含め、ご記入願います。
保護者同伴ではない場合は、保護者同意の自署が必ず2か所必要です。（別途、予診票あり）
署名がなければ予防接種を受けることができません。

予防接種を受けられない方

①明らかに発熱している方（接種時体温37、5℃以上）。
②重い急性疾患にかかっている方。
③ワクチンの成分（詳しくは医師にお尋ねください）によって過敏症（通常接種後30分以内に出現する呼吸困難や全身性のじんましんなどを伴う重いアレルギー反応を含む）をおこしたことがある方。
④生ワクチンを接種して28日以内の方、または不活化ワクチンを接種して6日以内の方。

予防接種前に医師によく相談しなければならない方

①血小板が少ない方や出血しやすい方。
②心臓血管系疾患、腎臓疾患、肝臓疾患、血液疾患、発育障害などの基礎疾患のある方。
③過去に予防接種で接種後2日以内に発熱のみられた方。
④過去にけいれん（ひきつけ）をおこしたことがある方。
⑤過去に免疫状態の異常を指摘されたことがある方、もしくは近親者に先天性免疫不全症の方がいる方。
⑥妊娠あるいは妊娠している可能性のある方（3回の接種期間中を含む）。